

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士(文学)	氏名	會下 和宏
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 弥生時代における墓制の展開とその社会			
論文審査担当者			
主査	准教授	野島 永	
審査委員	教授	古瀬 清秀	
審査委員	教授	竹広 文明	
審査委員	教授	西別府 元日	
審査委員	岡山大学大学院教授	新納 泉	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、日本列島に展開した弥生時代墳墓の様々な側面に検討を加え、弥生時代墓制を東アジア墓制の文化的脈絡に位置づけようとしたもので、はじめにと終章、本編4章で構成される。</p> <p>第1章では、これまでの弥生墳墓に関する研究史から、弥生墳墓研究における課題を整理し、以後の各章で検討を進める上での研究視座を提示した。</p> <p>第2章では、弥生時代各地に展開した土壙墓・木棺墓・甕棺墓などの埋葬施設や周辺遺構、それらを区画する墳丘・周溝などの遺構、墓域構成などについて整理し、それらの時期的変遷や地域的特色を検討している。その結果、弥生前期末葉から九州北部で、弥生中期中葉から近畿北部で、弥生後期から山陰・吉備南部でそれぞれ墓壙規模が大型化すること、そしてそれら大型墓壙の出現は木槨・舟底状木棺の埋置や鉄刀剣副葬などと相関性があることを指摘する。また、近畿北部では、幼・小児の血縁系譜が副葬品の格差によって表現され始めた可能性があること、埋葬施設周辺では掘立柱建物の設営などが葬送儀礼の一部として認識できることなど、新たな墳墓研究の成果を明らかにしている。</p> <p>第3章では、弥生墳墓の副葬品について検討している。弥生後期の山陰地域の大型墳墓には、鉄長刀・鉄長剣・ガラス製管玉などが副葬されており、墳丘規模に応じて副葬品の多寡がみられることを指摘する。また、北陸から中部高地を経て関東南部周辺の弥生後期墳墓には鉄短剣・鉄釧・銅釧・翡翠製勾玉・鉄石英製管玉など共通した貴重品が副葬され始めることから、地域首長による貴重品の贈与を紐帯とした政治的関係が広がっていく状況を想定している。さらには、鉄器副葬の地域的様相を整理し、青銅器埋納を行う地域と墳墓に鉄刀剣を副葬する地域が排他的に偏在している状況を看取り、墓制の比較という観点から重視すべき地域性であると説いている。</p> <p>第4章では、東アジアの墳墓の様相について概観し、古代中国において初期国家成立段階とされる二里頭・二里岡文化期の墳墓との比較を行っている。上位階層墓において銅戈などの近接武器が副葬される点については、弥生墳墓と共通する一方、墳丘の発達度合いはかなり緩慢なものであることを指摘する。ついで、前漢における皇帝陵や諸侯王墓との比較検討を行い、漢代においては、被葬者の身分秩序が墳丘規模などの量的格差、墓道形態の規制などに投影された状況を追認している。漢代墳墓の副葬品配置を概観したうえで、鉄剣・玉璧・青銅鏡の「重ね置き副葬」について検討し、倭において複数面の青銅鏡を重ね置いた副葬行為は、漢代墳墓にその祖形が認められることなどを指摘している。これらの成果を前提とし、鉄刀剣副葬、大型墳丘・大型墓壙造営、青銅器埋納・副葬行為などの各事象について、中国・韓半島の墳墓との比較や文化的影響を考察し、日本列島の地域ごとの墳墓の特質について具体的に論証している。</p>			

終章では、一連の考古学的検討に加えて、人類学・社会学的視座を取り入れ、死への対応手段、集団統合強化としての弥生墳墓儀礼という予察的解釈から、墳墓の構造、副葬行為、葬送行為を見直す方法論を提示して本論を締めくくる。

以上、本論文はこれまでの弥生墳墓の個別研究に偏ることなく総合的に考察し、墳墓規模と埋葬施設、副葬遺物などについて、中国・韓半島の墓制と比較しながら弥生墳墓を古代東アジア世界のなかに位置づけた労作として高く評価することができる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。